

幼児の観察研究

—実現しようとする意志を育てること(2)—



津 守 真

前回に、何ものかを実現しようとする意志が子どもの内にと
のようにして出現するかを見ることのできる観察を示し、考察
した。今回は、実現しようとする意志の内容をなすものはどの
ような性質をもつものであるかを示す観察についてまず考察す
る。次に、実現の意志に関連して、保育者の側の問題について、
観察例を示して考察する。いずれも、前回の「安心することか
らすてきにするこへ」実現しようとする意志の出現の過程」
のつづきをなすものであるので、それとあわせて見ていただき
たい。

二 水と砂と器をめぐるイメージの観察

—実現しようとする意志の内容としてのイメージ—

1 器(うつわ)、水、砂

幼稚園の砂場で、ひとりで熱心に遊んでいるSにふれて、そ
こで観察者としての私が経験しているイメージを探る。それは、
その観察の内側をなしている子どもの中に起こっていることと
同型のものに近づき得るはずのものである。

・Sは、器(うつわ)に水をいれ、その中に砂をいれる。そ
の表面を手でなでる。

観察者の側からみた観察の記録である。遊んでいる子どもに
とっては、器、水、砂ということばは、ここでは問題ではない。
実際にそれらにふれて動く体験があるのみである。子どもは、
へこみのある容器を手にとり、流れる液体を流しいれ、水の粘
着力で固められる砂を入れる。子どもの手はそれを自然のうち

に行ない、そのことによるこびを見いだす。私が観察をしていて不思議に思うのは、どうしてそんなに単純なことによるこびを感ずるのかということである。

へこみをもった器は、何かでみたされることを待っている。器は、人にとって生きた力をもっている。一歳にならない乳児でも、器を手にするとか何かを入れようとする。それが流動する液体であるならば、器のへりまで一ぱいにみだすことができる。子どもはそれを自分の手でしようとする。手が、満たすという自然の行為に従うまで、何度もくりかえされる。そこに反復するよろこびが生ずる。

子どもは水と砂をいっしょにする。水は分解する力と、結合し粘着させる力との両方をはたらかせる。水は砂を一粒一粒に分解し、またそれを結合させる。子どもは水を扱うとき、水のこのような両面の力にふれている。こねるときの水はそのような力をもった水である。

器に水と砂をいれて、それから、その表面を手でなでる。器に水と砂をいれるとき、子どもは自然の素材の与えるイメージに従って、自分もその自然の一部になって動いている。それに つづいて、器にいれた水と砂の表面を手でなでるとき、自分の手で、その表面を滑らかにしようとする意志がはたらいっている。

滑らかにしようとするのみでもなく、場に応じていろいろの變化をつくり出す可能性もあるし、子どもの個性によって、ヴァリエーションがありうる。この子どもは、ここで、表面を手でなでて、滑らかにしようとしている。それは触運動によって連続な面をつくることであり、それに伴う感じ方がある。触運動の感じ(イメージ)からいうならば、完全な宇宙は滑らかな球面である。子どもが、器にいれた砂を手でなでて滑らかにするとき、そこに完全さをつくり出そうとする意志をみる事ができよう。

・水を半分くらい入れかえ、手とシャベルをつっこみ、水をもうひとつの器に入れ、水をいれかえる。その水の中で皿を洗う。

水をいれかえるというのは、この操作をもう一度あらたにやり直すことである。一度砂の表面を滑らかにして、その水準での完全さに到達したかに思われたとき、そこに不足する何かを見いだし、はじめからやり直すことになる。

2 器と形

・砂の入った器を水の中に入れ、それを皿の上に伏せて、型をあけようとするがうまくいかない。何度も試みる。

・その器に、手で水を何度もかけ、両手でふたつの器を合わ

せてみる。ふたつをバケツの中に入れてとり出し、一方の器をとり去ると、器の上にプリンと重ねたような形になる。また器をかぶせて水にいれると、もつときれいな型がぬける。そこに両手で水をたらして形づけ、器をかぶせ、じつとおさえ、また器をとり去ると、もつときれいな形になる。それをハ―イとみんなのところにもつてゆく

へこみのある器に何かをいれることは、器のもつ精神的性質から自然に生ずることである。からの器があると、人はほとんど無意識のうちにそこに何かをいれる。器に何かが入っていると、人はそれをとり出そうとする。一つの動きのあるところには、対極となす動きがふくまれている。そしてその両者は反復されて進行する。

器にいれるものが水であるならば、出すときには流れ去る。固体であるならばそのままである。水と砂との結合物であるときに、器から出すときに、器の形が残る。

器の内側に合わせた形がそこに生れる。器の内側に合っていないなかつたり、欠けていると、その形が完全になるように、前のをくずして、何度も試みる。また、手でおさえついたり、滑らかにしたりして、子どもにとって満足のゆくような良い形になるまで何度も試みる。そして完全に近いものができたときに、

ハ―イとみんなのところにもつてゆく。ここで、子どもに完全なものをつくろうとする意志がはたらいていることを知る。

水と砂の結合物は、特定の形をもたないかたまりであるが、子どもの手はそこに形をつくり出す可能性をもっている。最初は、水と砂の自然の素材のイメージに従って、その一部になるところから生まれる形である。おさえ、にぎり、こねている間に形が生まれ出て、子どもはそれにおどろく。それから子どもは、個性に従って、形を作ろうとする自由な意志をもつ。そしてまた、あるきまった形に従って、形を作ろうとする。

子どもは、器に水と砂をいれてそれをひっくりかえして形を作る。その形があるべきものから欠けていて子どもに満足のゆかないときには、子どもはそれをくずしたり、手でなでて作り直す。何度でもくりかえし、満足するものになるまでやる。それは機械的反復ではなく、形に満ちたものを作ろうとする意志をもった試みである。

3 滑らかな世界の実現

・あいた器に白砂をいれる。皿(別の器)を洗う。そこに器をおくが、皿に少し砂がついてよごれるとまた洗い直す。器をさかさにして、しばらくおさえていると、型ができています。すぐにくずして他の砂をいれる。砂をまるめただんごをとり、

その皿の上へのせ、だんごの部分を手でかためる。皿の上に滑らかなだんごをのせたのをもって、「ゆかちャーン」とみせにゆく

子どもは皿に水をかけて砂を洗い流し、水と砂の形をおく。また、手のひらの上で丸くし滑らかにした砂と水のかたまりをおく。そのことを触運動感覚を媒介とするイメージの中におくならば、砂と水をこねる子どもの経験に近づくであろう。物をのせる皿を水で洗って砂が一粒もつかないようにすることは、物をとりまく世界全体を滑らかにし完全にすることである。その皿の上におく物もまた、てのひらで滑らかにまるめた球である。そこには触運動感覚で考えられるかぎりの完全さがある。子どもがそこで実現しようとしたものは、触運動面で滑らかさをもった完全な世界であったといえよう。

4 この観察記録の性質

子どもが何ごとかを実現しようとする意志をもち、それに向かって進み、それに近づく経験は、子どもの生活の中で重要であり、次の生活へと進んでゆくのに欠くことができない。その経験は、ひとつの過程の経験であり、前がなければ中がなく、中がなければ後がないというような不可逆な時間の中のできごとである。そのことは、私の前稿「安心することからすてきに

することへ」の中である程度明らかにしたことであり、また、本稿の観察からもみることができよう。実現しようとする意志は、素材のもつイメージを十分に感じることでできる時間と空間を経て、その中に生まれるものである。

実現しようとする内容も、観察された結果がひとつの表現であるような、子どもの内部に感じられているイメージである。それは、子どもの個性により、場面により異なる、その子どものものであって、ここに示したものはその一例にすぎない。別の子どもは、同じ砂場の場面でも、別のイメージをもち、それを実現しようとするであろう。いづれにしても、それは子どもの中に感じとられている范漠ちやばくとしたものであって、明確な形体そのものではないし、また、はっきりと順序づけられた遊びでもないのである。

三 実現の意志と実現させる者としての保育者

子どもが何ものかを実現しようという意志をもったときに、それが実現できるように助けるところに、保育者の重要なはたらきがあると思う。ある時は、上述の砂場の例のように、保育者は直接関与しないでも、子どもだけの力で実現できる。保育者は、そこで子どもが何をしているのか内容はわからなくても、

熱心に遊んでいることがわかっていけばよいのである。(この場合でも、子どもがひとりで熱心に遊べるような状態をつくり出すまでには、保育者のはたらきがあることは、もはやいうまでもないであろう。また、あるときには、子どもが何ものかを実現しようという意志を起したときに、それを叶えてやるのには、保育者が用意したり、周囲との調整をしてやらねばならず、あえてそうするかどうか、保育者の判断を必要とする場合もある。そして、実際の場面にあたると、子どもが何かをしたいというときに、それがどこまで子どもの心が奥深くに根ざしたものであるのかは明瞭でない場合が多い。次にかかげる記録は、そのような場合の観察であり、そのことから、保育者の判断について考察してみたい。

1 記録

P (4歳7ヵ月) は広告を切り抜いている。Y (2歳9ヵ月) もすわりこんで切り抜いている。K (10歳3ヵ月) は、プラカローで手製の舟の色をぬり、A (5歳11ヵ月) はえのぐでかいている。

Pがえのぐしたいという。

私は、えのぐの用意をしてやるが、筆をさがし、紙をだしなど、材料をそろえてやるのにけんめいになる。それから、小さ

い子どもがじゃまをしないようにするので忙しく、それ以上のことはできない。

Pは、水を自分でくんできて、えのぐのふたのとれないのをあけてやると自分で出し、えはだまって自分ひとりでかく、それ以上おとなの手をかけることはない。

Pは一枚かいたら、ぶらぶらして、それから昨日あそんだアートブロックをする。Aもえのぐを終わる。この間約一時間である。

2 この場面での保育者の判断

Pがえのぐしたいといったとき、保育者である私は、一瞬、どうしようかと迷いを生ずる。えのぐをしたいという子どもの希望をうけて、それができるようにするのがよいか、それとも違う道を選ぶ方がよいかという保育者の判断をせねばならない場面である。

ここで、子どもがえのぐをできるようにするには、実際上の障害がいろいろあるだろうということが瞬間的にわかる。AやKがえのぐをつづけられるようにしながら、Pのために筆や紙などの材料を出してやらなければならない。またその間に小さい子どもが、その動きにつられて動き出さないようにせねばならない。えのぐをする子どもが多くなれば、水をこぼしたり、

まわりがちらかることも多くなる。それらのことをするには、保育者は思い切って体を動かさなければならぬ。ひきうけるならば、当然起こることを前にして、あえてそれをするかどうか、一瞬ためらう。

他方、その場面で、Pはえのぐをしたいと強く願っていることが感じとられる。その願いはかなえてやりたいと思う。その二つの世界の間で立つて、どちらにしようかと迷う。そして、えのぐの用意をしはじめる。それからあとは、Pの願いを実現させるための実際の条件をととのえることに追われて、Pがどのように描いているのかをみる暇もない。

しかし、Pは、水を自分でくんでくるし、えのぐのふたのとなれないのをあけてやると自分で出すし、思ったよりもPに対して手がかからないで進行する。えのぐのえも一枚かいただけで終わり、目に見えた成果が得られたとはいえない。しかしあとになって考えても、これでよかったのだと思う。

3 保育における判断について

ここで保育者が自分できめなければならなかったことは、えのぐをさせるようにするか、それとも他のことをするようにするかということであった。それは現実界のことである。そのときに、この場面で保育者に感じとられていることがあった。そ

れは、この子どもがえのぐを通して何かをしたいと願っているということである。その何かは、えのぐでなければかなえられないのか、それとも、他のことでもかなえられるのかということとは、保育者の判断である。そこで子どもが何かを実現したいという願いを起こしていることがつかめているならば、えのぐをすることにきめるか、あるいはその他のやり方をするが、いずれであっても道が開ける。周囲の事情でいまそれをするのが困難であっても、それがかなえられない子どもに対する同情があるから、保育者の行動には、おのずから次への道が用意されるであろう。そして、この時には実現の意志が叶えられなくとも、次の機会には実現されるであろう。また、いずれを選んだにせよ、保育者にとって手にかかる困難なことはある。えのぐをやるならば、それに伴う労力が、他の道を選ぶならば、もしかするとかたくなに主張するかもしれない子どもを、他のことにきさいながら何かをするというようなことがある。そして、いずれにせよ、子どもが実現したいと願っていることが実現できるようにすることが、教育という大人と子どもとの間の営みの根底にあることの認識が判断の基礎となるとき、現実面だけで判断するのは異なった行為が出てくる。

「安心することからすてきにすることへ」および「水と砂と器をめぐるイメージの観察」において、実現の願いについて考察した。前者は、実現の願いが生まれる過程について観察し、後者はその内容としてのイメージについて観察した。意志の出現の前段階としての混沌の模索の期間を経て、実現の意志が生まれるのを見るとき、それは子どもの移ろいやすい好奇心とか、わがままということとはできない。その意志の出現には、子どもの側にも、大人の側にも、多くの努力の積み重ねがある。実現の意志は、人間の生活の中で貴重な位置を占めるものであることを、この他にも多くの事例に見ることができると。

その混沌の過程の期間や幅の大きさによって、実現の意志の深さは異なるので、それに応じて現実の判断もまた異なる。だから、えのぐをしたいといえ、いつでもえのぐをさせればよいという固定した公式を作っておくわけにもゆかない。しかし実際保育者として知ることのできることは、何かわからないけれども子どもはこんなにそれをしたがつているということだけである場合は多いので、それはかなえられるようにするのがよい場合が多いことも事実である。

子どもが実現したいと願う意志が出現したとき、それがかなえられるように助けることが、大人と子どもと共なる生活の根

底になければならず、その実現の経験が発達経験となることを保育観察の中によりとる経験をしておくこと、そしてそれが人間に共通の根源的な動向であることを知っておくならば、現実の具体的判断はこのときの状況によってきまるのでよい。現実の判断はAでもありうるし、A'でもありうる。すなわち、多様な具体的場面にあたって、保育者は迷うのである。根源的動向を知っていて、その上で迷うのである。具体的場面は常に新しく、そこには新しい経験がある。以前の経験と同種の経験が積み重ねられたとしても、自らの中でそれは深められて新たにたつてゆく、もしもそこで固定した原則にてらして迷わないで判断できるようにするとしたら、新たな現象にふれて学ぶ経験を失うことになる。現象は人間に共通根源の動向のあらわれであることを知りつつ、保育者は、常に新たに子どもにふれて学ぶのである。

(おわり)

みどり会研修会参加申込み 六月一日〜二十日消印まで有効。

往復はがきにヨコ書きで、氏名、勤務園名、園住所、連絡先住所、希望分科会（第二希望まで）宿泊か否か、日光観光希望の有無、を書いてお申し込み下さい。

宛先 東京都文京区大塚二十一―お茶の水女子大学附属幼稚

園内 みどり会